

目的 前報までと同様に香川県下に現存する庄屋文書により、近世、近代の香川県の食構造の年次的推移及び地域的相違をみる。

資料 讃岐国阿野郡北青海村渡邊家文書。渡邊家は現在の香川県坂出市青海町において室永年間に政所、天明年間に大政所、嘉永6年(1853)阿野郡北一帯の大庄屋などを勤めた家である。本報の資料は、嘉永6年(1853)から明治40年(1907)の55年間の同家の仏事関係の文書27頁の内、仏事献立の記録のある7頁(嘉永7年～明治38年)を対象とした。これらの中から40回分、106献立を抽出、分類し、仏事における献立構成を中心に食品、調理法などを分析した。更に、第1～3報、同家の坐右日記(弘化3年～嘉永2年)の献立構成との比較により、時代と家(地域)の特質をみる。

結果 (1)献立構成は文書を通じ、人を介して伝承されるためパターン化の傾向が認められる。(2)前後両日について、最も例数が多い代表パターンは下記のようなものである。更に各パターンに使用頻度の高い料理を組み込んだモデル献立を作成した。(3)献立構成は第3報の同家の詳月に比して、前後両日共に食品、品数などによる質的、量的増加の傾向がみられた。(4)献立は階級による差が顕著である。(5)会席による献立がみられた。

(前日) [包紙・胡椒 猪口 挽・温鈍 <後段> 皿 汁 平又は平皿 飯 鉢引
<夕永> 吸物 小皿 煮梁 大平 銘々盒 日頃の4品から8品

(後日) [生盛 汁 壺 飯 <ニノ膳> 猪口 ニノ挽 平又は平皿 茶碗 鉢引
<三ノ膳> 大皿 小吸 小皿 又は 壺引